

「く、狂三。歩くときは前見てた方がいいぞ……!?!」

士道が上擦った声でそう言うと、狂三は「まあ!」と目を見開いた。

「気をつけますわ。わたくしを気遣ってくださるだなんて、士道さんは優しいですわね」

「い、いや……そんなこと!」

「謙遜なさらないでくださいまし。士道さんの横顔に見とれてしまっていたわたくしが悪いのですわ」

「み、見と……ッ!?!」

士道は頬を真っ赤に染めて顔をペタペタと触った。——こ、こここの少女は今なんと言った? 見とれて? いやいや、あり得ない。この平々凡々な造作の顔面に注視すべき点などないことは、士道が一番よく知っている。

『あなたが口説かれてどうするのよ、士道』

そこで琴里のため息混じりの声が聞こえてきて、士道はハッと肩を震わせた。

「わ、悪い……」

『……しかしまあ、今までにないタイプの精霊であることは確かね。人間社会に溶け込んでいるのももちろん——向こうからこんなアプローチをかけてくるなんて』

琴里が「ふうむ」と考え込むようにのどを鳴らす。

『興味深い存在だからいろいろと情報を探りたいところね。……まあ、好感度上げつつ質問も織り交ぜていこうかしら。——と、ちょうどいいところで選択肢がきたわね。ちよつと待ちなさい』

〈フラクシナス〉 艦橋のメインモニタに、再び選択肢ウインドウが表示される。

①「**朝言**って**た精霊**って、**一体何なんだ?**」

②「**狂三**は、**前はど**の**学校**に**いたんだ?**」

③「**狂三**は**今**、**どんなパンツ**を**穿**いて**るんだ?**」

「総員、選択!」

琴里が叫ぶと、艦橋下段のクルーたちが一斉に手元のキーを押した。

すぐに結果が、琴里の専用ディスプレイに表示される。

「やっぱり、①かしらね」

集計結果と自分の選択を合わせ、琴里はあごに手を当てた。

「妥当かと。狂三は、士道くんが精霊を知っていることは知らないはず。一度揺さぶりをかけてみるのもよいでしょう」

後方から、神無月がそう言うてくる。

「そうね。——ちなみに神無月。あなたはどれに入れたの」

「③ですが」

「一応理由を聞こうかしら」

身体を軽く後方に向け、問う。

「黒タイツ越しのパンツは人類の至宝。些かの疑問を抱く余地もありません」

琴里はパチンと指を鳴らした。瞬間、艦橋に筋骨隆々の巨漢が二人入ってきて、神無月の両腕をがっしとホールドした。

「連れて行きなさい」

『はっ』

二人は同時に言うのと、神無月をざりざりと引きずっていく。

「し、司令！ お慈悲を！ お慈悲をおおッ！」

ふしゅー、という音をさせて、扉が閉まる。

静かになった艦橋で、琴里はため息混じりに口を開いた。

「……『狂三は今、どんなパンツを穿いてるんだ？』……ねえ。何なのこの選択肢」

「ま、まあ……下ネタで場が和むこともなくはないですから」

艦橋下段のクルーが、苦笑しながら言うてくる。

と、そこで琴里はびくりと眉を揺らした。

「あ」

先ほど姿勢を変えた際に、肘でマイクのスイッチを押してしまったのである。つまり、今の言葉は士道の耳に入っていたわけ——

『な、なあ……狂三は今、どんなパンツを穿いてるんだ？』

画面の中で、それを指示と勘違いした士道が、馬鹿正直にその言葉を復唱していた。

『ばんつ……ですの？』

「……ッ!!」

狂三がキョトンと聞き返してくるのを見て、ようやく士道は自分がとんでもない台詞を発してしまったことを自覚した。

「あ、いや、今のは——」

あたふたと手を動かしながら、抗議するようにインカムを小突く。

『馬鹿、今のは指示じゃないわ！ 本当は①よ。』朝言ってた精霊って、一体何なんだ？』

「は……はあ……っ?」

『とにかく誤魔化しなさい! 今のは冗談つてことにして、本当の質問に繋げるの!』

「お、おう……!」

士道は小さくうなずき、狂三に向き直った。

「あ、あのだな、狂三」

しかし狂三の表情と仕草を見て、言葉を止められる。

狂三は上目遣いで士道を見ながら、プリーツスカートの裾をきゅっと摘んでいた。

「……気に、なりませんの?」

「えッ!? あ、そ、そりゃあ……じゃなくて、ええと——」

そりゃ気にならないわけはないのだが、そんなことを口に出すわけにもいかない。

だが士道がしどろもどろになっていると、狂三はキョロキョロと辺りを見回し、身体をさっと、近くにあった掃除用具入れの陰に隠した。

「く、狂三……?」

狂三の行動の意味がわからず、眉をひそめる。

すると狂三は恥ずかしそうに頬を染めると、小さく唇を開いてきた。

「いい……ですわよ、士道さんなら」

そう言つてスカートの裾を摘んだ手を、徐々に上に上げていった。

「え……ええ……ッ!?!」

まったく予想していなかった展開に、目を見開く。

しかしそうこうしているうちにも、狂三はするするとスカートを捲り上げていった。黒いタイツに覆われた脚が段々と露わになり——禁断のデルタゾーンが微かに顔を出す。左右に引つ張られて薄くなつた黒い生地越しに、一瞬白い下着が見えた。

「——ッ!!」

士道は咄嗟に目を瞑ると、狂三のスカートの裾を掴んで下に引つ張った。

「あら、あら」

狂三が不思議そうに言ってくる。

「どうしましたの? 士道さんになら……構いませんわよ?」

「や、いいから! な! 先進もう!」

「うふふ、照れ屋さんですね。——ああ、でも、先に進むのなら、スカートを離してくださいませんこと?」

「……っ!」

言われて、士道はハッと目を開いた。……端から見たなら今の士道は、女の子を物陰に

連れ込んでスカートを捲っている超絶変質者にしか見えなかった。

「す、すすすすまん……っ！」

慌てて手を離す。狂三はさして気にするふうもなくすすくと笑った。

『士道、慌てないで体勢を立て直しなさい』

と、琴里から指示が飛ぶ。士道はわざとらしく咳払いをすると、もとの道に戻りながら、今度はちゃんと先ほど与えられた指示通りに質問をした。

「あ、あのさ、狂三」

「ええ、なんですの？」

「朝、『私は精霊だ』って言ってたじゃないか。精霊って一体、何のことなんだ？」

士道が問うと、狂三は一瞬キョトンとし——すぐに、ふふっ、と微笑んでみせた。

「——うふふ、とぼけなくてもいいんですよ、士道さん。あなたはちゃんと知っているのでしょう？ 精霊の、ことを」

「……………」

狂三の言葉に、士道は息を詰まらせた。

『……………何なの、この女は』

琴里も同じように、訝しげな声を響かせてくる。

『士道が精霊の存在を知っていることを確信している……………？ 一体どういうことよ』

それが士道に対する問いかけでないことはすぐに知れた。琴里の疑問を代弁するように口を動かす。

「な、なんで俺のこと、知ってるんだ……………？」

「ふふっ、それは——秘密ですわ」

「え……………」

「でも、わたくしは士道さんに会うために、この学校に来ましたの。士道さんのことを知ってから、ずっと焦がれていましたわ。士道さんのことを考えない日はないくらいに。だから——今は、すごく幸せですわ」

なんて言って、狂三が頬を桜色に染めてくる。

「……………ッ!!」

士道は、顔が熱くなるのを感じた。自分からは見えないけれど、もしかしたら耳から煙くらい噴いているかもしれない。

なんだ。なんだこれ。媚びるとか、愛されガールとか、そういう次元じゃなく、なんかもう狂三という存在が愛おしくてたまらなくなるような、そんな感覚が士道を支配する。

中学生のころ、ガラス戸に置いてあった父のウイスキーを舐めたときのような、とろんと

した酩酊感。少し気を抜いたらその場にくずおれてしまいそうですらあった。

『だから、それじゃあ立場が逆でしょうが！』

「は……っ」

琴里の声で我に返る。

「さ……っ、先急(う)るか！」

土道は大きく深呼吸しながら、できるだけ狂三の目を見ないように足を動かした。

なぜだろうか……あれ以上目を合わせていたら、もうその場から動けない気がしたのだ。

『……ち、まあ簡単には口を割らないか。仕方ないわ、攻略を続けましょう。——にしても情けないわね。完全に主導権握られちゃってるじゃない』

「う、うるせ……」

『ま……やられっぱなしってのも癪ね。ちょっと揺(ゆ)ぶりかけてみましょうか』

この続きは11月19日発売の『デート・ア・ライブ』で…

(c)2011 Koushi Tachibana